古代エジプトによるヌビア統治が生みだしたもの
―上ヌビアのサイを中心に―

田　中　延　和

はじめに

古代エジプト人は、アスワン以南のナイル川中流域の地を「ヌビア人の土地」と呼んだ[1)]。このヌビアの地は、すでに古代エジプト王朝時代以前より、サハラ以南のアフリカの地と西アジアとを結ぶ交易ルートの要衝であった。この交易ルートはナイル川だけでなく、東西の砂漠地帯にあるオアシスや紅海を結ぶものであり、ヌビアは多様な人々が行きかう場でもあった。とりわけ関係の深かったのがエジプトで、エジプトとヌビアの間には、交易だけでなく戦争状態の時もあり、お互いの勢力範囲も時代とともに大きく変化した。

古代ヌビア研究が本格的に開始されたのは、20 世紀になってからのことである。ヌビア地域の最初の調査は、バッジやライズナーなど、エジプト学者によってなされた[2)]。エジプト学者により研究が始まったことや、当時の植民地主義的な背景[3)]から、ライズナー以降 20 世紀前半頃までは、エジプト中心主義的な歴史として描かれる傾向にあった。

つまり、偉大なエジプトの文明がヌビアに伝わった[4)]とか、エジプトの文明がヌビアに伝わることでヌビアは発展し、伝わったエジプト文化が衰退することでヌビアも衰退していったというような見方[5)]である。

エジプト中心主義的な傾向が特に著しいのは、エジプトがヌビアに侵攻し支配するようになった新王国時代（前 1550-1086 年頃）[6)]の研究であった。この時代についてのエジプト中心主義的な研究とは、エジプトによる統治を経て、古代ヌビアの劣った文化は優れたエジプト文化と同化したというようなとらえ方のことである。

新王国時代のエジプトのヌビア統治により、ヌビア社会も大きく変化した。エジプトの物質文化が流入し、居住地遺跡からは多くのエジプト土器や用具類、装身具などが発見されている。またピラミッドの上部構造を持つ墓が出現し、エジプト様式の埋葬が激増するようになった。このような

1）地図 1 参照。

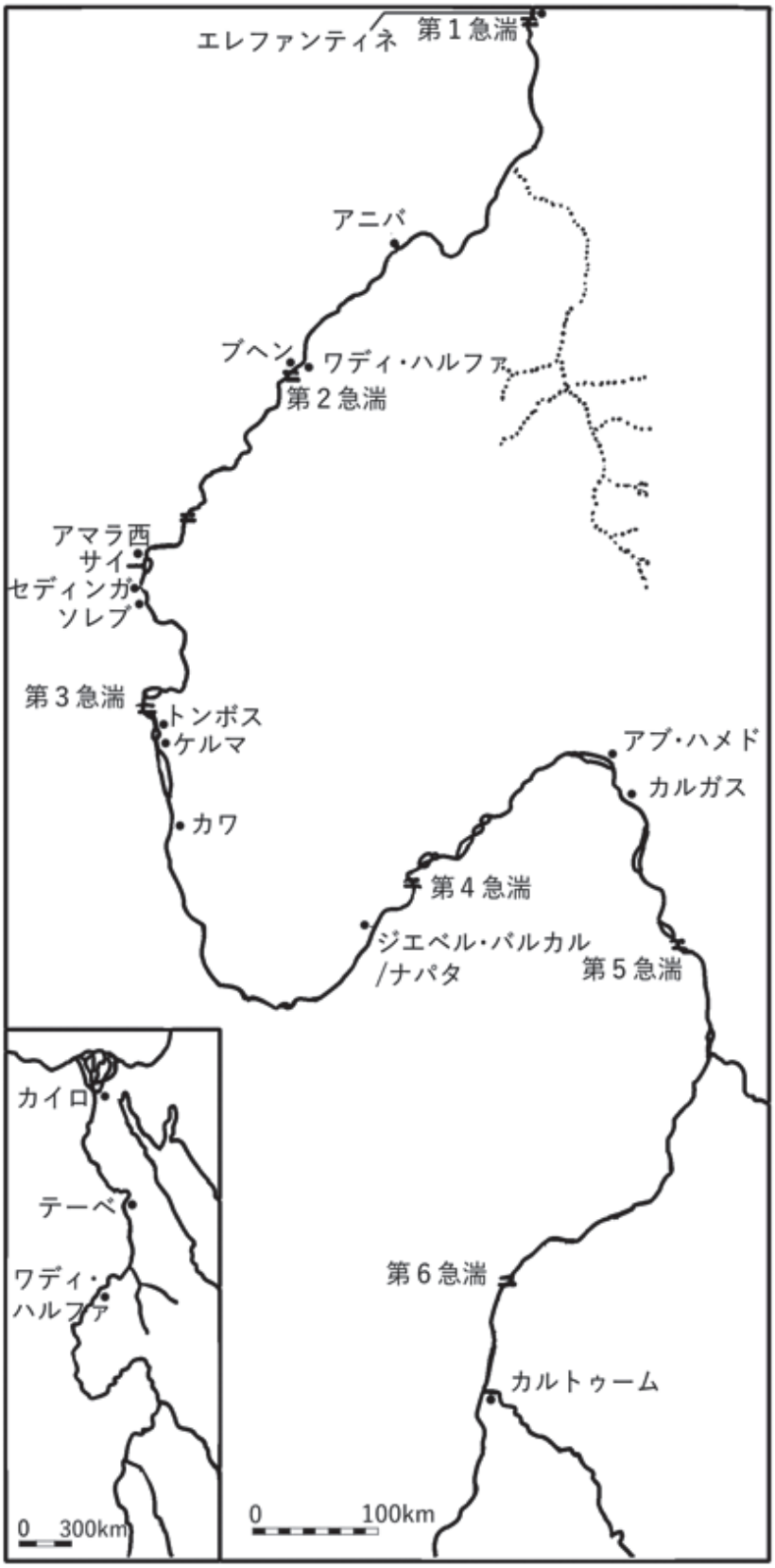
2）坂本翼「スーダン考古学史」『古代文化』70-1、2018 年、101-108 頁、103 頁。

3）K. Howley, “Power Relations and the Adoption of Foreign Material Culture: A Different Perspective from First-Millenium BCE Nubia”, *Journal of Ancient Egyptian Interconnections* 17 (2018), pp. 18-36（以下、Howley (2018) と略）, p. 19.

4）E. A. W. Budge, *Egyptian Sudan: Its History and Monuments*, vol. 1, London: Kegan Paul, Trench, Trübner & Company Limited, 1907（以下、Budge (1907) と略）, p. 507.

5）前 1000 年紀前半のクシュ王国の成立とその後の展開について、本来的な弱さをもつアフリカの王国の衰退の過程ととらえる傾向があった。L. Török, *The Periods of Kushite History: From the Tenth Century BC to the AD Fourth Century*, Budapest: Ízisz Foundation, 2015（以下、Török (2015) と略）, p. 13.

6）古代エジプトの編年、王の在位年については、基本的に河合望『古代エジプト全史』雄山閣、2021 年に従った。



地図1　ヌビア略図

（出典）
L. Török (2015) 所収、‘Map of Nubia’ を基に作成。

多くのエジプト由来のものが発見される状況から、先に述べたような、ヌビア文化はエジプト文化と同化したとする研究が多くなる。

しかしこの説の根拠となっているのは主として下ヌビア[7]のエリート層の埋葬であり、上ヌビアについてもサイ、アマラ、トンボスといったエジプトが建設した拠点の資料に偏る傾向があるというような、結論が先にあるような研究動向であった。このようなエジプト中心主義的理解を象徴するような語が、今も多くの研究者が用いる「エジプト化」（Egyptianization）である。

「エジプト化」という語が使われるようになったのは、20 世紀初頭のライズナーの調査からである。当初はヒクソスから逃れてきたエジプト人が住むようになったと理解されていた。つまり、「エジプト化」とはヌビアがエジプト人の住む地域になったというような理解である。

しかし考古学的調査が進み、先に述べたエジプト物質文化の増加は、エジプト人の移住によるものではないということが明らかになってくると、「エジプト化」の語は、伝統的なヌビアの生活様式からエジプトの生活様式への変化と言う意味で使われるようになった[8]。つまり、ヌビア文化がエジプト文化へ同化するプロセスの意味で、「エジプト化」の語が使われるようになったのである。

一番の問題は、「エジプト化」の概念が、エジプト文化の優位とエジプト文化の影響を受ける集団が劣っているということを仮定していることにある[9]。また、「エジプト化」という見方は、史料に基づくものというより、あらかじめエジプト優位の観念がありそれに合わせて解釈するという姿勢があることである。例えば、非エリート層の「エジプト化」を主張するとき、その根拠がたいていの場合ただ一つの遺跡（墓地）であり、他の資料は検討もされていない[10]という指摘がある。

エジプト中心主義的な見方は、20 世紀末ごろより批判されるようになる。エジプトの影響という一方向的な変化を強調する研究を批判し、様々な集団あるいは個人の絡み合い（entanglement）で複雑な状況となっていたという指摘がされるようになった[11]。スミスの主張の重点は、エジプトの統治下においても、特に女性の主体性によりヌビアのアイデンティティは保持される[12]という点にある。エジプト中心主義を批判するため、エジプト文化とヌビア文化を対抗的にとらえ、ヌビア文化の持続を強調するのである。

7）下ヌビアとは、ナイル川第 1 急湍から第 2 急湍の間の地域を指す。エジプトとヌビアの境界域となっている。なお、第 2 急湍から現在のカルトゥーム付近までを上ヌビアと呼ぶ。

8）L. Weglarz, “Continuity and Change: A Re Evaluation of Cultural Identity and ‘Egyptianization’ in Lower Nubia during the New Kingdom”, Ph.D. Dissertation, The University of Chicago, 2017（以下、Weglarz (2017) と略）, pp. 1–2.

9）A. de Souza, “The Egyptianisation of the Pan-Grave Culture: A New Look at an Old Idea”, *Bulletin of the Australian Centre for Egyptology* 24 (2013), pp. 109–126, p. 110.

10）Weglarz (2017), p. 20.

11）その代表として、スミスの一連の研究がある。その例としては、S. T. Smith, “Colonial Entanglement, Immigration, Acculturation and Hybridity in New Kingdom Nubia (Tombos)”, in: M. Honegger (ed.), *Nubian Archaeology in the XXIst Century: Proceedings of the Thirteenth International Conference for Nubian Studies, Neuchâtel, 1st-6th September 2014*, Leuven: Peeters, 2018（以下、Smith (2018) と略）, pp. 71–89.

12）S. T. Smith, “Revenge of the Kushites: Assimilation and Resistance in Egypt’s New Kingdom Empire and Nubian Ascendancy over Egypt”, in: G. E. Areshian (ed.), *Empires and Diversity: On the Crossroads of Archaeology, Anthropology, and History*, Los Angeles: Costen Institute pf Archaeology Press at University of Carifornia, Los Angeles, 2013, pp. 84–107. スミスが女性の主体性を強調する根拠は、出土する土器が新王国時代にエジプト様式に変化する中で、調理用ポットは、逆にヌビア様式が増加するからである。第 1 章第 3 節の表 1 参照。

このようなエジプト中心主義批判は、カーンの表現を借りるなら、エジプト中心主義からヌビア中心主義への移行[13]と表現できるものでもあった。はたしてエジプト文化とヌビア文化というように、ナイル川流域の文化を別のものとして描くことが妥当なのであろうか。古くから交流のある地域であり、人々や物が行きかう地域に、このような静的な把握は単純に過ぎる。

また、理論的にも「純粋、別々」の文化は存在しない[14]し、文化は相互の交流、絡み合い(entanglement)、再構成によって形成される。つまり、文化はスペクトラムとしてとらえることが重要であり、この意味で、固定的な「エジプト文化」や「ヌビア文化」は存在しないととらえることが重要である。極めて流動的な歴史の流れを「エジプト化」という枠組みに当てはめて評価することは、歴史性地域性の軽視につながり、歴史的経過を単純化する危険がある。

以上のような問題意識から、本稿ではエジプトによるヌビア統治でどのような変化が生じたのか、また、それをどのようにとらえるべきかについて論じる。対象として、上ヌビアのサイ[15]を中心的に分析する。上ヌビアは新王国時代に初めてエジプト統治下に入った地域であり、サイはヌビア統治の拠点として最初に建設された町である。エジプト文化とヌビアのかかわりを考察するのに適した地と考える。

現在、最も新しいサイの研究成果は、ブドカを中心としたチームによるものである。ブドカらは、サイの歴史や特質について次のように説明する。エジプトによるヌビア統治の時代、エジプトの土器や用具、習慣等がサイにもたらされ、急激に「エジプト化」が進む。しかし、トトメス3世(在位：前1479-1425年頃)の頃以降になるとエジプト・ヌビアの要素がミックスされた「ハイブリッド」なものが出現する。つまりヌビア統治の結果、サイではエジプトとヌビアのミックスされた複雑な生活様式が形成されたという主張[16]であり、その要因として通婚とファミリー同士の関係の形成[17]を推定する。

ブドカの研究には、いくつか問題点が存在する。第1は、いまだに「エジプト化」の語を定義な

13) D. Kahn, "Some Thoughts on Egyptian Elements in Kushite Religion and Rituals", in: T. A. Bács, Á. Bollók and T. Vida (eds.), *Across the Mediterranean – Along the Nile, Studies in Egyptology, Nubiology and Late Antiquity Dedicated to László Török on the Occasion of His 75th Birthday, Volume 1*, Budapest: Institute of Archaeology, Research Centre for the Humanities, Hungarian Academy of Sciences, 2018, pp. 411-425, p. 411.

14) P. W. Stockhammer and B. Athanassov, "Conceptualising Contact Zones and Contact Spaces: An Archaeological Perspective", in: S. Gimatzidis, M. Pieniążek and S. Mangaloğlu-Votruba (eds.), *Archaeology Across Frontiers and Borderlands: Fragmentation and Connectivity in the North Aegean and the Central Balkans from the Bronze Age to the Iron Age*, Wien: Verlarg der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2018, pp. 93-112, p. 102. また、バーダーも同様の主張をしている。B. Bader, *Material culture and Identities in Egyptology: Towards a Better Understanding of Cultural Encounters and Their Influence on Material Culture*, Vienna: Austrian Academy of Science Press, 2021, p. 33.

15) サイとはナイル川にある島の名前であるが、その島にエジプトが建設した拠点も一般的にサイと呼ばれている。本稿でサイとあるときはこの町のことを意味し、島の意味でサイを使用するときはサイ島と表す。サイ島は、第2急湍と第3急湍のほぼ中間に位置する。

16) ブドカはエジプト中心主義批判として、複雑性を強調する。J. Budka, *Across Borders 2: Living in New Kingdom Sai*, Vienna: Austrian Academy of Science Press, 2020, pp. 409-427.

17) サイの近くにあるアマラ西を研究するスペンサーも、通婚やファミリーの交流を重視する。N. Spencer, "Settlements of the Second Intermediate Period and New Kingdom", in: D. Raue (ed.), *Handbook of Ancient Nubia*, Berlin: De Gruyter, 2019, pp. 433-464, p. 446.

しで使用する[18]ことである。第2に、歴史的過程の複雑さは指摘するものの、エジプトとヌビアの「ミックスされた複雑な生活様式」が形成される、あるいは「ハイブリッド」なものが出現するという、どの場所や時代にも当てはまるごく当たり前の結論にとどまっていることである。

複雑性の指摘は重要である。しかし、具体的にどのような事態が進行していたかについて、さらに分析する必要がある。従来の研究の資料は考古学調査に基づく土器や装飾品、墓地での埋葬の様式が中心であった。本稿では、従来ほとんど注目されてこなかったサイにおける文字使用に焦点を当てる。文字使用は生活様式や社会のあり方、人々の世界観にかかわる事柄であり、ヌビア社会の歴史的変化をとらえることのできる重要なポイントだからである[19]。

用語について補足したい。前述のように、エジプトあるいはエジプト人、ヌビアあるいはヌビア人という言葉の使用については、その多義性から慎重であるべきではあるが、現時点での研究段階では適当な表現についての共通理解はない。便宜的にエジプト居住の人をエジプト人、ヌビアと呼ばれる地域に居住する人々をヌビア人と呼ぶことにする。

第1章　エジプトによるヌビア侵攻と統治

第1節　歴史的概観

第17王朝最後の王カーメス（在位：前1555–1550年頃）[20]はエジプトの再統合を図り、シリア・パレスチナ方面へ侵攻するとともに、ヌビア方面へも軍を進めた。カルナク神殿から発見されたカーメスのステラ[21]に、「エジプトの北と南にアァム（慣例でアジア人と訳される）とクシュ人の領主がいてエジプトが分断されている。（中略）私はエジプトを救いアァムを攻撃する」[22]という王の言葉が書かれている。領土の回復と対外侵攻を進めようとする王の意図が、ここには明白に描かれている。

このころ、上ヌビアを統治していたのはケルマ王国で、その勢力範囲は第1急湍付近まで及んでいた[23]とされる。しかし、最近の研究では、第1急湍よりさらに北、テーベにも近いエルカブまでケルマが攻め込んだ記録も見つかっている[24]。以前考えられていたよりも、その国力は強大であったと考えられるようになってきた。

18）今でもエジプト化の語を使用する研究者は多い。そして、ほとんどの場合、定義なしで使用している。文脈で判断するなら、エジプトの影響を受けたというような意味で使用していると考えられるが、その意味ならエジプト化の語は適切ではないと考える。

19）スコットは、初期の文字が国家と結びついており、国家の衰退とともに文字使用も衰退するとし、同じ理由から文字の発明によりすべての社会がそれを採用したと考えるのは誤りだとしている。J. C. スコット（立木勝訳）『反穀物の人類史：国家誕生のディープヒストリー』みすず書房、2019年、136–137頁。

20）この在位年は、イアン・ショー、ポール・ニコルソン（内田杉彦訳）『大英博物館古代エジプト百科事典』原書房、1997年（原著は1995年）、125頁による。

21）石碑のこと。

22）W. K. Simpson, *The Literature of Ancient Egypt: An Anthology of Stories, Inscriptions, Stelae, Autobiographies, and Poetry*, Third Edition, New Haven: Yale University Press, 2003, p. 346.

23）D. Kahn, “History of Kush- Outline”, in: F. Jesse & C. Vogel (eds), *The Power of Walls - Fortifications in Ancient Northeastern Africa. Proceedings of the International Workshop held at the University of Cologne 4th-7th August 2011, Colloquium Africanum* 5, Köln: Heinrich-Barth-Institut, 2013, pp. 17–31（以下、Kahn (2013) と略）, p. 17.

24）W. D. Davies, “Kush in Egypt: A New Historical Inscription”, *Sudan & Nubia* 7 (2003), pp. 52–55, pp. 52–53.

カーメスはケルマ統治下のヌビア方面へ侵攻し、第２急湍近くの町ブヘンを支配下に置いた[25]。下ヌビアについてはエジプトの勢力範囲に収めたようである。

次の王イアフメス（在位：前1550-1525年頃）は、ブヘンに *ṯsw*（軍司令官）としてトゥリを配置し、下ヌビア統治を確実なものとした。この後、イアフメスは南方へ数回の軍事行動を実施する[26]。「（北方での戦いの後）王は、ヌビア人を攻撃するためにケントヘンネフェル[27]までナイル川をさかのぼり、大量殺戮を行った」[28]と史料にある。イアフメスは戦いに勝利した後、サイ島に軍事拠点を設けた[29]。この戦いでの勝利により、第２急湍よりさらに南にエジプトの勢力が拡大する。イアフメスの時代に、サイに初めてエジプト軍の駐屯地が建設されたということである。

その後、約50年にわたってエジプトの南進が続く。注目すべきは、トトメス１世（在位：前1504-1492年頃）である。彼の時代に、さらに南へとエジプトの勢力が拡大する。そのことを示すのがトトメス１世のステラで、第４急湍上流のカルガスで発見された。「このステラを冒涜するものは、どのヌビア人も、どの外国人も（中略）その首領は殺されるであろう」[30]という記述がある。また、「これまで、この地まで到達した王はいなかった」という表現もあり、このことから、彼の時代にエジプトのヌビア支配は、上ヌビアのカルガスにまで及んだとされる。

しかし、カルガスに居住地遺跡やエジプト人の墓地が発見されない[31]ことから、第３急湍にエジプト人が建設した町のような、移住者も含めた町ではなかった可能性が高い。つまり、カルガスという交易の重要拠点は確保したが、周辺地域一帯を支配したというわけではなく、軍の駐屯地であったと考えるべきである。

またトトメス１世は、アムン・レー神[32]にささげる神殿を建設した。ヌビアに神殿を建設することは、新王国時代に行われた重要な事業であるが、これが記録に残る最初のものと考えられる[33]。

トトメス１世に関してもう一つ重要なことがある。それは、ヌビア統治の拠点として *mnn.w*[34]

25）Kahn (2013), p. 17.

26）E. F. Morris, *The Architecture of Imperialism: Military Bases and the Evolution of Foreign Policy in Egypt's New Kingdom*, Leiden: Brill, 2005（以下、Morris (2005) と略）, p. 70.

27）ケントヘンネフェルの位置は特定されていないが、クシュ方面、つまり上ヌビアの地域をさすことばではないかと考えられている。A. J. Spalinger, "Covetous Eyes South: The Background to Egypt's Domination of Nubia by the Reign of Thutmose III", in: E. H. Cline and D. O'connor (eds.), *Thutmose III: A New Biography*, Ann Arbor: The University of Chicago Press, 2006, pp. 344-369, p. 347.

28）水軍の司令官イアフメスの、墓室内に記された自伝碑文による。J. H. Breasted, *Ancient Records of Egypt: Historical Documents*, volume Ⅱ, Chicago: The University of Chicago Press, 1906（以下、Breasted (1906) と略）, p. 8.

29）E. F. Morris, *Ancient Egyptian Imperialism*, Hoboken: Wiley Blackwell, 2018, pp. 119-120（以下、Morris (2018) と略）

30）W. V. Davies, "Nubia in the New Kingdom: The Egyptian at Kurgus", in: N. Spencer, A. Stevens and M. Binder (eds.), *Nubia in the New Kingdom*, Leuven: Peters, 2017, pp. 65-105, p. 72.

31）ibid, p. 65.

32）アムン神はテーベ地域で信仰されていた神。エジプト中王国時代（前2055-1650年頃）、エジプトの国家神とされるようになった。レー神は、エジプトで古くから信仰されている神であるが、アムン神が国家神となった時以降、アムン神とレー神は一体のものとされるようになった。R. H. Wilkinson, *The Complete Gods and Goddesses of Ancient Egypt*, London: Thames & Hudson, 2003（以下、Wilkinson (2003) と略）, pp. 92, 205-206.

33）Kahn (2013), p. 18.

34）要塞の意味であるが、トトメス３世の頃には決定詞に町を表すヒエログリフが使用されることから、単なる軍の基地ではなく居住地を含む要塞と考えられる。

を建設した[35]ということである。エジプトはナイル川流域に *mnn.w* を建設し、ヌビアを統治するという政策をとった。のちに続くヌビア統治の基本路線が、このころに確立されたと思われる。

このように勢力範囲を広げてきたエジプトであるが、必ずしも最初から安定した統治ではなかった。トトメス２世（在位：前 1492–1479 年頃）、ハトシェプスト（在位：前 1473–1458 年頃）の頃にも何回かの反乱[36]おきたことが確認されており、カーンはハトシェプストの頃には南部でかなり広い範囲の支配権を喪失したという推定もしている[37]。

最終的に反乱を鎮めたのは、トトメス３世の頃になる。のちに述べるようにサイの町が軍の拠点から行政の拠点に変化したのがこの時期であり、ジェベル・バルカルにアムン神殿の建設が開始されるのもこのころである[38]。トトメス３世は、精力的に上ヌビアでの建設活動を展開する。次のアメンヘテプ２世（在位：前 1427–1400 頃）以降、新王国時代エジプトはその最盛期を迎える。

第２節　エジプトによるヌビア統治

エジプトのヌビア侵攻の主な目的は、金を含む鉱物資源や人的資源の確保、アフリカとの貴重品交易ルートの確保であったと考えられる[39]。エジプトがどのような政策でヌビアを統治したかについて、最近特に重視されているのがヌビアの地域支配層[40]をどう扱ったかということである。

また、ヌビア内の地域による違いにも着目されるようになってきた。下ヌビアと新たな領土となった上ヌビアの違いがそれであり、最近ではさらに上ヌビアの中でも第３急湍より南の地域の独自性に着目されるようになった。

ヌビア統治機構は、おおよそ明らかになっている。統治機構のトップの地位としてよく知られているのが総督[41]（*sꜣ nsw*）で、35 名の名前[42]が確認されている。総督にはエジプト人のエリート層が任じられたようである。それぞれの総督について調べると、親子あるいは血縁関係にある者が多く、有力者のファミリーが力を持っていたことがわかる。

総督は、トトメス４世（在位：前 1400–1390 年頃）の頃、クシュ総督（*sꜣ nsw n Kꜣš*）に改称された[43]。

35）このことについては、次章でその根拠となる史料とともに取り上げる。

36）D. Valbelle, “International Relations between Kerma and Egypt”, in: J. R. Anderson and D. A. Welsby, *The Fourth Cataract and Beyond: Proceedings of the 12th International Conference for Nubian Studies*, Leuven: Peeters, 2014, pp. 103–109, p. 107.

37）Kahn (2013), p. 18.

38）トトメス３世の神殿建設に伴い、ヌビアにアムン神信仰が広まる。J. Kuckertz and A. Lohwasser, *Introduction to the Religion of Kush*, Dettelbach: Verlag J. H. Röll, 2019, p. 46.

39）R. Morkot, “The Economy of Nubia in the New Kingdom”, *Actes de la Villle Confé rence Internationale des étude nubiennes. Lillie 11-17 Septembre 1994*, vol. 1, Lille: Université Charles-De-Gaulle, 1995, pp. 175–189, pp. 179–182; Morris (2005), p. 94.

40）本稿では、それぞれの地域に存在する小領主的な人々を地域支配層と呼ぶ。エジプト人が *wrw*（地域の長、支配者という意味の *wr* の複数形）と呼ぶ人々である。ただし、下ヌビアと違い、上ヌビアでは具体的なことはまだよくわかっていない。

41）意味は「王の息子」。王との近いつながりを表すが、本当の親子ではない。

42）A. Gasse and V. Rondot, “The Egyptian Conquest and Administration of Nubia during the New Kingdom: the testimony of the Sehel Rock-inscriptions”, *Sudan & Nubia* 7 (2003), pp. 40–48, p. 42.

43）意味は「クシュの王の息子」。R. Morkot, “From Conquered to Conqueror: The Organization of Nubia in the New Kingdom and the Kushite Administration of Egypt”, in: J. C. M. Garcia (ed.), *Ancient Egyptian Administration,* Leiden: Brill, 2013, pp. 911–963（以下、Morkot (2013) と略）, p. 926.

アメンヘテプ２世あるいはトトメス４世の頃からは、上ヌビアと下ヌビアにそれぞれ副総督（*idnw*）が配置された[44]。総督となったのは主としてエジプトのエリート層であるが、副総督については現地の支配層から主に登用されたようである[45]。副総督に次ぐ第３の地位にあるのが長官（*ḥꜣty-ʿ*）[46]で、サイやアマラなどに配置された。この長官も、各地域から選ばれている。つまり、ヌビア人のファミリーあるいはヌビアに住むエジプト人ファミリーからである。

以前は、エジプト人の役人がヌビアにやってきて統治にかかわったとされてきたが、近年では、エジプトの支配下ではあるが地域支配層が一定の独立を維持したことや、そのような地域の支配層を統治に活用した[47]ことがわかってきた。

このシステム維持のために取った方策の一つが、地域支配者の子どもをテーベ[48]に送り[49]、そこで言葉や政策について教育するということであった。そしてこの子どもたちが次期地域支配者となるのである。ただし、上ヌビアの多くの地域で子どもをテーベに送ることは義務とは言えない[50]ことから、上ヌビアは下ヌビアとは違い、独立性を保っているとことにも留意したい。

このような地域支配層の活用という政策は、ヌビアの地域支配層にとっても一定の利益があることであった。エジプトの政策は、いわば「アメと鞭」であり、反抗すれば弾圧する[51]が、従えば利益にもあずかれるというものでもあったからである。また、副総督や長官として、またその配下になって統治に加わることで、地域での今までの地位が保障されるとともに、貢物あるいは税を納めるとエジプト側からの還流もあるという経済的にも利がある内容であった。

現状では不明な点がまだ多いが、エジプトの統治システムはおおむねこのような仕組みであった。ここで重要なことは、地域支配層の活用というエジプトの政策により、エジプト侵攻後もそれまでのヌビア各地の統治システム[52]は存続したであろうということである。

44）Morkot (2013), pp. 925, 936–937.

45）Morris (2018), p. 104, p. 238; Morkot (2013), p. 925.

46）*ḥꜣty-ʿ*は、地方政体の長という意味で、ヌビアでは、サイやアマラなどの町に配置された。定訳はまだないので、例えばサイ近辺の統治者という意味で、長官の語をあてておく。

47）W. V. Davies, “Egypt and Nubia”, in: C. H. Roehrig (ed.), *Hatshepsut: From Queen to Pharao*, New York: The Metropolitan Museum of Art, 2005, pp. 49-56（以下、Davies (2005) と略）, p. 53; M. Binder, “Cultural Tradition and Transitions during the New Kingdom Colonial Period and Its Aftermath: Recent Discoveries from the Cemeteries of Amara West”, in: J. R. Anderson and D. A. Welsby, *The Fourth Cataract and Beyond: Proceedings of the 12th International Conference for Nubian Studies*, Leuven: Peeters, 2014, pp. 487–505, p. 501.

48）テーベは古代エジプトの主要な町のひとつであったが、中王国時代以降、テーベが王宮所在地、つまりエジプトの中心都市となった。T. Wilkinson, *The Thames & Hudson Dictionary of Ancient Egypt*, London: Thames & Hudson, 2005（以下、Wilkinson (2005) と略）, pp. 243–244.

49）トトメス１世は、反乱鎮圧後男はすべて殺したが、一人の子どもとその従者だけをテーベに送ったという内容の碑文がある。これがおそらく、その最初のものであると思われる。T. Säve-Söderbergh and I. Troy, *New Kingdom Pharaonic Sites, The Finds and Sites*, 5:2, Uppsala: Paul Åström Editions, 1991（以下、Säve-Söderbergh and Troy (1991) と略）, p. 210.

50）Morris (2018), p. 161.

51）前述のイアフメスの自伝碑文に、反乱鎮圧のとき、反乱の首謀者を船の舳先にさかさまにぶら下げてエジプトに帰還したなどという記述がある。Breasted (1906), p. 34.

52）ヌビアでのそれまでの体制については、詳細はわからない。現在わかっているのは、ヌビアにいくつか小国が存在したこと、それぞれに統治のための役人がいたこと、下ヌビアではその地に住むエジプト人を役人として活用したことなどである。また、下ヌビアでのエジプト人との交流から、例えば書記や監督者のようなエジプトの称号もケルマ王国では使われていたので、エジプトに倣った統治システムであった可能性もある。B. G. Trigger, *Nubia under the Pharaohs*, London: Thames and Hudson, 1976, p. 94; Morkot (2013), pp. 923–924.

さらに、第３急湍南のカワより上流のジェベル・バルカルまで、エジプト人居住遺跡や墓地の遺跡が発見されない[53]ことから、第３急湍から第４急湍の間では、さらに独立性が高いものであった可能性がある。つまり、サイなどのように副総督などエジプト行政機構の役人が居住して監督することもなく、現地の支配者に業務を委託しているだけという可能性があるということである。エジプト統治下で、上ヌビアで地域支配層が存続あるいは成長したことは重要である。後の時代のことであるが、前 1000 年紀のクシュ王国成立の前提として、新王国時代における地域支配層の存続と成長を重視する見方[54]が最近主流となってきている。

第３節　サイの役割とその特徴

トトメス２世がアスワン・フィラエ[55]間に残したステラに、次のような記述がある。

> トトメス２世の治世１年、アケト[56]の２番目の月の７の日、ある者が知らせをもたらした。クシュが、２つの国（エジプト）の王に服従する者たちと共謀して反乱をもくろみ始めた。（中略）あなたの父のアアケペルカラー王[57]が、ケントヘンネフェルのヌビアの部族の反乱を抑えるため建設した要塞（複数）（中略）。（反乱の首謀者は）クシュの北の部族長とその二人の子どもたちである。（中略）部族長は善き神々の殺戮の日に逃げ出した。この地は５つの部分に分けられた[58]。

これはトトメス１世の政策がうかがえる史料で、明確でない部分もあるが次のようなことがわかる。トトメス２世のとき反乱がおこったこと、トトメス１世が軍事拠点の *mnn.w*（要塞の意）を建設していたこと、この地域に地域支配層が存在していたこと、クシュの北の部族長がその子どもたちと反乱を企てたこと、部族長は敗北し逃亡したこと、その後この地域が５分割されたことである。あいまいな記述であるが、地域を５分割したように取れる内容から、地域支配層を活用しながらもその勢力範囲を分割し、力を制限する政策も取られたという推定もできる。

その後、エジプトの勢力範囲が拡大するとともに、軍事的拠点であった町の性格も変化する。副総督、長官が置かれるようになり、神殿の建設、統治機構の整備をへて、これらの町は政治的、経済的、宗教的なヌビア統治の拠点[59]となったと考えられる。つまり、副総督あるいは長官が居住し、金や鉱物資源の採掘とエジプトへの移送、アフリカとの交易、農業生産などを監督する役割を

53）D. A. Welsby and I. Welsby Sjöstörm, “The Dongola Reach and the Fourth Cataract: Continuity and Change during the 2nd and 1st Millenia BC”, *Cahiers de Recherches de l'Institut de Papyrologie et d'Égyptologie de Lille* 26 (2006–2007), pp. 379–397（以下、Welsby and Welsby Sjöstörm (2006–2007) と略）, p. 380. なお、この地域ではエジプトの土器等のモノもあまり発見されない。地域ごとの違いに着目すべきであろう。

54）M. A. El-Samani Al-Nasri, “The Emergence of Kush”, in: J. R. Anderson and D. A. Welsby, *The Fourth Cataract and Beyond: Proceedings of the 12th International Conference for Nubian Studies*, Leuven: Peeters, 2014, pp. 531–536, p. 534.

55）フィラエはアスワンの南、約８km に位置する島。イシス神殿があったところ。

56）増水季の意味。エジプトの１年は 12 か月で、１年を４か月ごとに３つの季節に分けていた。アケト（増水季）、ペレト（播種季）、シェムウ（収穫季）である。アケトは、およそ今の７月下旬頃からの４か月である。近藤二郎『エジプトの考古学　改訂版』同成社、2012 年、3–8 頁。

57）トトメス１世のこと。

58）P. Lundh, *Actor and Event: Military Activity in Ancient Egyptian Narrative Texts from Tuthomosis II to Merenpta*, Uppsala: Department of Archaeology and Ancient History, Uppsala University, 2002, pp. 35–36.

59）N. Spencer, A. Stevens and M. Binder, “Introduction”, in: N. Spencer, A. Stevens and M. Binder (eds.), *Nubia in the New Kingdom*, Leuven: Peters, 2017, pp. 1–61, p. 21.

果たすようになったということである[60]。

このような拠点となる町としてあげることができるのが、サイ、ソレブとアマラ西である。アメンヘテプ３世（在位：前 1390–1352 年頃）からセティ１世（在位：前 1294–1279 年頃）まで、エジプトが統治の拠点とした町はソレブで、セティ１世以降は拠点をアマラ西に移した[61]。

サイ島は、ケルマ王国にとっても重要な拠点であった。ケルマ人居住地についてははっきりしないが、島の北部に大規模な墓地があることから、大きな町が存在したと思われる。また、ナイル流域の通行を監視することや、水運の拠点として物資の搬出入などに適した立地でもあったため、エジプト側にしても軍事的に重要な場所と考えていた[62]と思われる。

また、サイはその位置から金の採掘との関連も明らかになっており[63]、金の確保の点でも重要であったし、良質の砂岩を産する採掘場[64]も存在していた。このような資源確保の意図も、サイに軍の拠点を建設した要因として考えられる。

このサイ島に軍の拠点が建設されたのは、先に述べたようにイアフメスの頃であった。このサイを拠点に、エジプトはさらに南方へと軍をすすめたと考えられる。つまり、エジプトによるヌビア侵攻の初期の頃、サイはエジプト軍の橋頭堡の役割[65]を果たしていたのである。この時期のもので発掘されている施設は倉庫跡が主なものであること[66]から、ブドカの考えるように[67]、このころは単なる軍事基地的施設であったと考えるのが妥当であろう。

居住地が拡大し周壁も建設され、サイが大きく変化するのがトトメス３世の頃である。周壁の幅は約 4.4 m、縦横約 240×120 m の町[68]となる。副総督の拠点と考えられる役所はこのころ建設された。大規模な倉庫や住居跡などもこのころ建設されたもののものと確認されている。また、重要性が指摘される砂岩の神殿も、トトメス３世のときの建設である。サイの神殿跡から発見された碑文の断片に、「メンケペルラー王[69]の治世 25 年の年、（中略）王は王の息子（総督）、南の外国の監

60）Morkot (2013), p. 95.

61）J. Budka, “The New Kingdom in Nubia: New Results from Current Excavations on Sai Island”, *Egitto e Vicino Oriente* 37 (2014), pp. 55–87, p. 57.

62）中王国時代の王センウセレト１世（在位：前 1965–1920 年頃）およびセンウセレト３世（在位：前 1874–1855 年頃）のころ、エジプトがケルマを攻撃する際の拠点としたという記録がある。J. W. Yellin, “Sai Island”, in: M. M. Fisher, P. Lacovara, S. Ikram and S. D’Auria (eds.), *Ancient Nubia: African Kingdoms on the Nile*, Cairo: The American University in Cairo Press, 2012, pp. 329–331, p. 330.

63）J. Vieth, “Urbanism in Nubia and the New Kingdom Temple Towns”, in: J. Budka and J. Auenmuller (eds.), *From Microcosm to Macrocosm*, Leiden: Sidestone Press, 2018, pp. 227–238, pp. 232–234.

64）サイより 112 km 下流に位置する、クムマの神殿のトトメス３世の碑文に、「サイの美しい石で建てられた神殿」という記述がある。R. A. Caminos, *Semna-Kumma II: The Temple of Kumma*, London: Egypt Exploration Society, 1998, p. 51.

65）Davies (2005), p. 51.

66）J. Budka, *Across Borders 2: Living in New Kingdom Sai*, Vienna: Austrian Academy of Science Press, 2020（以下、Budka (2020) と略）, pp. 525–526.

67）J. Budka, “The Egyptian ‘Re-conquest of Nubia’ in the New Kingdom: Some Thoughts on the Legitimization of Pharaonic Power in the South”, in: F. Coppen, J. Janác and H. Vymazalová (eds.), *Royal versus Divine Authority. Acquisition, Legitimization and Renewal of Power. 7th Symposium on Egyptian Royal Ideology, Prague, June 26-28, 2013*, Wiesbaden: Harrssowitz, 2015, pp. 63–82, p. 68.

68）I. Adenstedt, *Reconstructing Pharaonic Architecture in Nubia: The Case Study of SAV1, Sai Island*, Vienna: Austrian Academy of Science Press, 2016, p. 21.

69）トトメス３世のこと。

督者であるネヒに神殿建設を命じた」[70] という記述がある。多くの土器あるいは土器片も出土している。町の規模が拡大するとともに、居住する人々の数も増加したと考えられる。町の性格も大きく変化し、軍の駐屯地的な性格からヌビア統治の行政的中心地へと変貌したと考えられる。

また、サイではトトメス3世の頃より土器の種類が多様になる[71]。ミケーネやパレスチナからの、アンフォラや提瓶[72] が発見されるのもこの頃である。このような輸入品が存在するということは、サイに住む人々が、多様な文化を受容していたということを示すものである。

このような町の隆盛はアメンヘテプ2世以降、約100年続く。しかし、第19王朝（前1295-1186年頃）のセティ1世（在位：前1294-1279年頃）によるアマラ西建設以降は、統治の拠点はサイからソレブを経てアマラ西に移る。なぜ新たにアマラ西が建設されたのか、またサイとアマラ西はどのような関係であったかについてはよくわかっていない[73]。

これ以降、サイでの建設活動や土器等の出土資料が減少する。経緯は不明瞭であるが、エジプトの活動の衰退、あるいはエジプトの町としての衰退がそこにあるように思える。ブドカは、第19王朝期もサイは引き続き重要な場所であったとするが、説得力はあまりない[74]。

第18王朝後期以降、ナイル川流域や砂漠地帯でエジプトへの敵対的行動が多発する[75] ようになる。加えて、第19王朝、第20王朝（前1186-1069年）のころになると、理由は明らかではないが金の産出量が激減する[76]。資源の枯渇かもしれないが、金の採掘作業が機能しなくなったとも考えられる[77]。エジプトのヌビア統治が、うまくいかなくなってきたのではないか。第20王朝期には、エジプトは弱体化し、上ヌビアでの影響力が減少する[78]。サイおよび上ヌビアでのエジプトのプレゼンスはこれ以降激減する。

新王国時代末期の上ヌビアについては不明な点が多く、今のところ確かな像を描けない。しかし過去の例ではあるが、第2中間期の頃、下ヌビアではケルマの支配下になった時でも町は放棄されずエジプト人が住み続けたこと、要塞に駐屯する守備隊がヌビア人女性とファミリーを形成したこと[79] から考えると、サイからエジプトが撤退した後も残留エジプト人が一定いたであろうことが

70）W. V. Davies, “From Halfa to Kareima: F. W. Green in Sudan”, *Sudan & Nubia* 18 (2014), pp. 2-19, pp.7-8.

71）トトメス3世の治世後半、エーゲ海地方との交流が活発化する。サイの事例もこの状況を反映したものと言える。遠藤颯馬「エジプト新王国時代とエーゲ海世界―トトメス三世とアメンホテプ三世の治世を中心に―」『駒沢史学』95、2021年、23-41頁、30頁。

72）J. Budka, “The Early New Kingdom at Sai Island: Preliminary Results Based on the Pottery Analysis (4th Season 2010)”, *Sudan & Nubia* 15 (2011), pp. 23-33, p. 31.

73）N. Spencer, “Creating and Re-Shaping Egypt in Kush: Responses at Amara West”, *Journal of Ancient Egyptian Interconnections* 6-1 (2014), pp.42-61, p. 42.

74）Budka (2020), p. 425. ブドカが根拠としているのは、アマラ建設後も、副総督の名前を含む遺物がサイで発見されることと、副総督を含む高官が埋葬場所にサイを選んだというものである。しかしこれは、当時の人々の出身地に対する愛着の強さを考えれば、この高官の出身地がサイ近辺であったことを示すだけかもしれない。

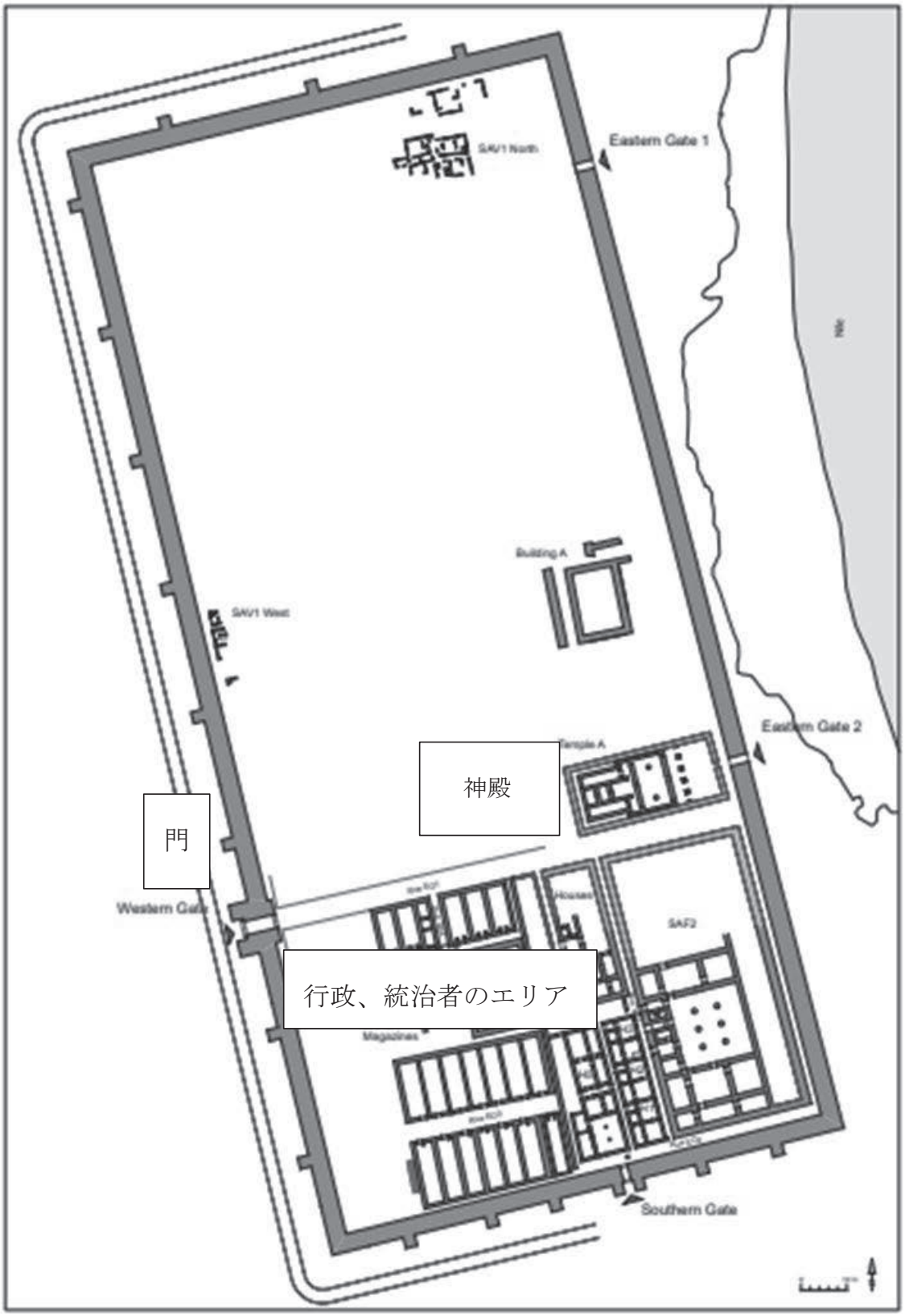
75）N. Spencer, “Settlements of the Second Intermediate Period and New Kingdom”, in: D. Raue (ed.), *Handbook of Ancient Nubia*, Berlin: De Gruyter, 2019, pp. 433-464, p. 443.

76）J. Vercoutter, “The Gold of Kush”, *Kush* Ⅶ (1959), pp. 120-153, pp. 135-136.

77）ibid, p. 137.

78）L. Török, *Between Two Worlds: The Frontier Region between Ancient Nubia and Egypt, 3700BC-500AD*, Leiden: Brill, 2008, p. 201.

79）S. T. Smith, “The Garrison and Inhabitants: A View from Askut”, in: J. Friederike and C. Vogel (eds.), *The Power of Walls: Fortifications in Ancient Northeastern Africa*, Köln: Heinrich-Barth-Institute, 2013, pp. 269-291, pp. 270-271.



地図２　トトメス３世以降のサイ

（出典）
I. Adenstedt, “The Fortifications of the Pharaonic Town on Sai Island: A Reinvestigation”, in: J. Budka and J. Auenmuller (eds.), *From Microcosm to Macrocosm*, Leiden: Sidestone Press, 2018, p. 143.

推定できる。エジプト撤退後も、SAC5[80]における埋葬でエジプト様式のものがみられることもこのことを裏付けている。

以上みてきたように、サイはエジプトの町として発展する。これに伴い、人々が使う物もエジプト様式のものに変化し、埋葬様式もエジプトのものに変化する。先に述べたように、このことからブドカは急激に「エジプト化」が進行したと言う。しかし、エジプト様式の土器や埋葬習慣の増加を、単純に「エジプト化」と評価できるであろうか。エジプト様式の土器や埋葬習慣についてはスミスの研究があり、単なるエジプト文化の受容ではなく、ヌビアの人々の歴史的状況に応じた主体的な選択という視点が提起されている[81]。

スミスの研究は、ヌビアに住む人々の視点からエジプト様式の土器や埋葬習慣の広がりを解釈し、単純な「エジプト化」論に与しない点に意義がある。しかし、エジプト統治下という植民地的状況を重視することから、ヌビアの人々のエスニシティに基づくアイデンティティを強調する傾向にあるため、スミスの描く歴史像もまた単純化しすぎている。つまり、エジプトへの対抗的側面が強調されすぎているということである。エジプト統治下ではあるけれども、さらに広い視点からヌビア文化の状況についての研究が必要である。このため、次章では、宗教や統治機構、経済と大きくかかわる文字使用に焦点をあて、エジプトによる統治下にあったサイの変化について考察する。

表１　アスクートにおける出土物全体に対する各用途別土器の割合

	食事提供用	保存用	調理用ポット
中王国時代	2.0%	0.8%	45.5%
第２中間期	11.0%	5.9%	65.0%
新王国時代	4.3%	3.5%	83.1%
全体	4.5%	3.1%	70.8%

（出典）
S. T. Smith, *Wretched Kush: Ethnic Identities and Boundaries in Egypt's Nubian Empire*, London : Routledge, 2003, p. 118 より作成。

80）新王国時代中期から使用されるようになった、サイにおけるエリート層の墓地。J. Budka, "Pyramid Cemetery SAC5, Sai Island, Northern Sudan an Update Based on Fieldwork from 2015–2017", *Ägypten und Levante* 27 (2017), pp. 107–130, p. 110.

81）エジプト様式の土器が増加する中で、調理用ポットには、逆にヌビア様式の土器が使用されている（表１参照）。また、エジプト様式の埋葬であるにもかかわらず、ヌビア様式の屈葬が採用されていることなどに、スミスは被葬者の主体的な選択という見方を提起している。Smith (2018), pp. 71–89.

第2章　上ヌビア社会と文字

エジプトによる侵攻後、ヌビア社会が変化する。その変化がどのような質のものであったかについて、これまでは主に墓地あるいは居住地遺跡から発見された土器、装飾品、あるいは埋葬様式を根拠に論じられてきた。エジプト統治下となり、エジプトから多くの人々がやってきている状況から、土器や埋葬様式がエジプトのものになってくるのは当然である。また、職人も移住してきたであろうことから、エジプト様式の土器の方が入手しやすくなった可能性も考えられる。したがって、これらの資料からヌビアが「エジプト化」したと評価するのは単純に過ぎる。

そこで、これまでほとんど触れられることがなかった文字使用について考察を加えたい。ここでいう文字は、エジプトのヒエログリフである。この時代の文字は、経済や外交活動に使用されるほかに、エジプトでは神々と人間をむすびつけるものであり[82]、官僚機構とも結びつくものであったからである[83]。文字使用の分析を通して、社会の特質も明らかにできると考える。エジプトを比較対象とし、どのような場面でどのように文字が使用されているか、あるいは使用されなかったかについて考察する。史料の残存状況から、十分な分析とは言えない。しかし、おおよその傾向は描くことができると考える。史料としては町の中での文字使用の記録と、墓地であるSAC5の調査報告を使用する。墓地では、伸展葬の採用や副葬品など埋葬様式が変化することから、「エジプト化」論の根拠とされてきた。しかし、何が副葬品とされたかの分析はあっても、名前や文字のかかわりについてはこれまで検討されていない。本章では、その点に焦点をあてる。

第1節　ヌビアの言葉と文字

古代ヌビアは文字を持たず、記録を残してこなかった[84]。前1000年紀前半の頃になるとエジプトのヒエログリフで書かれた王の碑文が残されているが、ヌビアの文字はまだない。ヌビア社会が文字を持つのは、前3世紀頃のことである。

文字を持たない古代ヌビアであったが、文字との接点がなかったわけではない。紀元前4000年紀には、エジプトとヌビアを含むアフリカから西アジアへの広大な交易権が成立しており、文字を使用するエジプトとヌビアには長期にわたる関係がある[85]。

また、第2中間期（前1650–1550年頃）の頃、ケルマ王国が下ヌビアを支配していた時期がある。第1章で述べたように、テーベの近くまでケルマの軍が侵攻した時期のことである。新王国時代のエジプトは、ヌビアの地域支配層を活用することを基本としたが、ケルマも同様であった。ケルマの下ヌビア統治を担ったのは、下ヌビア征服後もエジプトに帰らず、その地に残ったエジプト人で

82）F. Doyen and L. Gabolde, “Egyptians Versus Kushites: The Cultural Question of Writing or Not” in: N. Spencer, A. Stevens and M. Binder (eds.), *Nubia in the New Kingdom*, Leuven: Peters, 2017, pp. 149–158, pp. 152–153.

83）R. Morkot, “Kings and Kingship in Ancient Nubia”, in: M. M. Fisher, P. Lacovara, S. Ikram, and S. D’Auria (eds.), *Ancient Nubia: African Kingdoms on the Nile*, Cairo: The American University in Cairo Press, 2012, pp. 118–124, p. 118.

84）S. K. Doll, “Text and Writing in Ancient Nubia”, in: M. M. Fisher, P. Lacovara, S. Ikram, and S. D’Auria (eds.), *Ancient Nubia: African Kingdoms on the Nile*, Cairo: The American University in Cairo Press, 2012, pp. 154–166, p. 154.

85）前3300–3000年頃、ヌビアからパレスチナにかけての長距離交易網が成立したと考えられている。高宮いづみ『古代エジプト―文明社会の形成―』京都大学学術出版会、2006年、39頁。

あった[86]。彼らはケルマとエジプト人の仲介者として働くとともに、行政も担当した。そのようなエジプト人の名前が数名わかっている。有名なのが、ブヘン[87]のカーとセペドホルである。また、デドソベクのような通訳や書記を担当する者も存在していた[88]。

下ヌビアを統治していた時期に、ケルマ人はヒエログリフに触れる機会は多くなった。だが、ケルマ人が、文字を積極的に活用した痕跡はない。特定の目的や場面でヒエログリフを使用したようであるが、残存史料は限定されている。

その一つは東部砂漠の岩に記された碑文で、この地がケルマの勢力範囲にあることを、メジャイ[89]やエジプト人の金採掘職人に示していると解釈されているものである[90]。もう一つはエレファンティネで発見された印影で、「レー神の息子、クシュの支配者」の語が、カルトゥーシュとともに記されているものである[91]。ともにケルマ王の権威を表すもので、対外的な場面で、ケルマ以外の人々を対象にした使用であった。エジプト語について、また王をレー神の息子と考える王権と神のつながりについてケルマ側がよく理解していることがわかる。特に後者のカルトゥーシュの使用は、それが王家メンバーの名前に用いられるのを知っていたことを明確に示しており、注目すべきであろう。

ケルマ王国にはヒエログリフを理解し書くことができる書記がいただけではなく、王や支配層もヒエログリフの意味をよく知っていたことがうかがえる。だがこの時点でも、まだ特定の場面で借用するだけの使用にとどまっており、ケルマ内部の統治に利用された跡は発見されていない。つまり、対外的な関係という特定の文脈での使用は認められるものの、エジプトの侵攻以前の時点では、文字の使用はヌビア文化にとって重要な要素とは見られていないことを示している。

第2節　サイの町と文字

サイはエジプト人の町なので、町のレイアウト、建物、土器類は、圧倒的にエジプト様式である。すべての居住者がエジプトから移住してきた人々ではないが、居住しているヌビア人もエジプトへの協力者であろうことから、文字使用の痕跡は周辺の地域より多いと推測できる。つまり、「エジプト化」と言われるような変化が生じていたのなら、エジプトの町のように文字が豊富に存在して当然という状況であったということである。

以下、ポーターが作成したまとめ[92]に、その後の調査結果を加えて、サイという地域でどのような文字史料が発見されたかについて、おおよそのエリア別にまとめてみる。対象とするのは神殿を含む町の中である。

86）S. T. Smith, *Wretched Kush: Ethnic Identities and Boundaries in Egypt's Nubian Empire*, London: Routledge, 2003, pp. 80–82.

87）ブヘンは第2急湍近くにあり、エジプトが建設した軍事、下ヌビア統治の拠点の一つ。

88）J. Cooper, "Kushites Expressing 'Egyptian' Kingship: Nubian Dynasties in Hieroglyphic Texts and a Phantom Kushite King", *Ägypten und Levante* 28 (2018), pp. 143–167, p. 146.（以下、Cooper (2018) と略）

89）メジャイとは東部砂漠を中心に居住・活動したとされる人々。

90）Cooper (2018), p. 144.

91）Cooper (2018), pp. 146–147.

92）B. Porter and R. L. B. Moss (eds.), *Topographical Bibliography of Ancient Egyptian Hieroglyphic Texts, Reliefs, and Paintings VII: Nubia, The Deserts, and Outside Egypt*, Oxford: Griffice Institute, 1952 (Reprinted in 1995)（以下、Porter and Moss (1952) と略）, pp. 164–166.

エジプトの町で文字が最も残りやすいのは神殿である。ステラや像が奉納されるからである。サイでも、いくつかのステラや碑文が確認されている。最も注目されてきたものの一つが、第１章で紹介した総督ネヒによる神殿建設の碑文である。神殿の柱に記されている。また、神殿の柱に総督ネヒ、神殿扉跡の左の側柱に副総督ウセルマアトレーナクト[93]の名前が確認されている。

王による碑文では、アメンヘテプ１世（在位：前 1525-1504 年頃）、アメンヘテプ３世のものが確認されているが、アメンヘテプ３世のステラは現在その所在が不明[94]である。また、トトメス３世のカルトゥーシュが断片ではあるが発見されている。アメンヘテプ１世のステラの内容は、劣化が激しく読み取れないところもあるが、ほぼ神への賛辞の文である。

神殿の外で文字使用が認められるのは、カーの家と呼ばれる礼拝所に奉納した人物の像、建物の柱とまぐさ石[95]、町の中および住居跡で発見されるステラ、護符、スカラベが主なものである。

像については、イアフメスとアメンヘテプ１世の名前が記された像[96]が、それぞれ発見されており、名前とともに神への賛辞が記されている。総督のものでは、ウセルサテトの像[97]がある。いくつかの破片に分かれていて判読しにくいところもあるが、総督をはじめとする他の様々な称号、ウセルサテトという名前、神へ賛辞が記されている。また、称号は不明だが、デドソベクという名が下部に記された像の一部も発見されている。

総督セタウの名前がわかるステラ片発見されている。おそらくラメセス２世（在位：前 1279-1213 年頃）時のステラである。神の名前が書かれていると思われる、カルトゥーシュの形の粘土の板[99]も発見されている。アマラ西では、個人が家に設置した祭壇 が住居跡から発見されたが、サイでは今のところ見つかっていない。

柱やまぐさ石では、今のところ副総督のホルナクトの名前が記されたまぐさ石[100]と、最近、西のエリアから発見された、*nṯr-nfr nb-tꜣ.wj*（善き神、二つの国の王）と書かれたまぐさ石だけで、後者は柱の土台として再利用されたものであった。

ヌビアでは、まぐさ石に個人名や神の名前が書かれていることがある。個人名で多いのは、例えばトトメス３世のような王の名前や総督の名前である。ヌビアでのエジプトの王の神格化はよく知られており、トトメス３世、アメンヘテプ３世、ラメセス２世がその代表的存在である。

93）ラメセス９世のときの副総督。この柱は、プロイセン王国による調査を指揮したエジプト学者レプシウスがこの地に来た時には、まだ崩れずにその場に立っていたようである。J. Vercoutter, “New Egyptian Texts from the Sudan”, *Kush* Ⅳ (1956), pp. 66-82, pp. 76-77.

94）バッジがサイに初めて来たとき、発見したこのステラを運ばせたという記述がある。ただし、バッジは周辺の調査をほとんどしておらず、発見の状況は明らかでない。Budge (1907), p. 462.

95）建物の入り口の柱の上に、水平に渡した石のこと。

96）D. A. Welsby and J. R. Anderson, *Sudan: Ancient Treasures*, London: The British Museum Press, 2004, pp. 102-103.

97）W. V. Davies, “Statue-cache from Sai: Putting the Pieces Together”, in: N. Spencer, A. Stevens and M. Binder (eds.), *Nubia in the New Kingdom*, Leuven: Peters, 2017, pp. 133-148, pp. 134-139.

98）J. Budka, “The New Kingdom in Nubia: New Results from Current Excavations on Sai Island”, *Egitto e Vicino Oriente* 37 (2014), pp. 55-87, p. 66.

99）N. Spencer, “Creating and Re-Shaping Egypt in Kush: Responses at Amara West”, *Journal of Ancient Egyptian Interconnections* 6-1 (2014), pp. 42-61（以下、Spencer (2014) と略）, p. 49.

100）J. Budka, “Constructing Royal Authority in New Kingdom Towns in Nubia: Some Thoughts Based on Inscribed Monuments from Private Residences”, in: T. A. Bács and H. Beinlich (eds), *Constructing Authority: Prestige, Reputation and the Perception of Power in Egyptian Kingship*, Wiesbaden: Harrasssowitz Verlag, 2017, pp. 29-45, p. 36.

個人の家の玄関にこのような王名を書くということには、2つの意味があると解釈されている。第1に護符としての役割である。その家の幸福、豊穣、健康等への願いを表している。もう一つは、王への忠誠を表すためのものということである。ネヒのような総督や他の官僚の名前が王の名前とともに書かれていることもあり、これはエジプトの権威を示すもの、エジプトの統治への忠誠を示しているもの[101]と解釈できる。

また、エレファンティネやアニバで見つかったまぐさ石のように、自分の故郷で信仰の対象となっている神の名前が書かれることもある。これは、ヌビアに赴任してきたエジプト人の望郷の念という解釈をされている[102]。ただ、サイでは今のところこのような王名、総督名の遺物は発見されていない。また、故郷の神を表すものも報告されていない。しかし、サイの近くのナイル川東岸で総督ヘカナクトとラメセス2世の名前が入ったまぐさ石が見つかっているので、サイ近辺にヌビアの他の地域と同じような慣習が入ってきていることは事実であり、これからの調査で発見される可能性はある。

他に文字が確認できるものに、印影と印章がある。経済的活動の拠点と考えられる東側のエリアで、印影が221個発見されており、アメンヘテプ1世、ハトシェプストとトトメス3世、総督ネヒの名前が確認できる。しかし、印章で文字が確認できるものについては不明である。

以上、サイの神殿を含む町での文字使用例について、報告されているものを確認してきたが、ここから次のような特徴が指摘できる。第1に、文字の使用は少ない。神殿以外で確認される文字が王や総督の名前がほとんどだということからわかるように、報告されている文字使用は、エジプトによるヌビア統治と関連した文脈での使用しかない。つまり、総督や書記などのエジプト人による使用がほとんどいうことである。ヌビア人と関連するのは二人の副総督のものだけで、しかも碑文が残っているわけではなく名前のみである。エジプトの王や総督の威信を示すもの、あるいはエジプトの統治機構に属する副総督が自らをアピールするための文字使用と考えられる。印影も発見されるが、数量等の物の管理に使われたものがほとんどで、単なるラベル的な使用である。

以上をまとめると、サイではエジプト人による文字使用が中心で、そこからヌビア人の文字使用につながるような動きや変化は見られないということである。

第2に、土台としてのまぐさ石の再利用についてである。資材の再利用はよくあることだが、神について書かれた文字のある石材の再利用からは、文字の意味を重視しないサイの人々の意識がうかがえるのではないか。

文字のある石材の再利用については、アマラでも第20王朝時代の住居址の例がある。そこでは、扉の側柱が再利用されているのだが、特徴的なのは文字の向きが逆さになった状態で建てられている[103]ことである。サイの例のように、柱に書かれている文字はその意味を喪失している。つまり、最初に使用した人がその文字に込めた意味が、再利用する人には無意味となっているということで

101）J. Budka, “Addressing the Gods Home Away from Home: Case Studies from New Kingdom Nubia”, in: T. A. Bács, Á Bollók and T. Vida (eds.), *Across the Mediterranean – Along the Nile, Studies in Egyptology, Nubiology and Late Antiquity Dedicated to László Török on the Occasion of His 75th Birthday*, volume 1, Budapest: Institute of Archaeology, Research Centre for the Humanities, Hungarian Academy of Sciences, 2018, pp. 379–390, p. 381.

102）ibid, p. 380.

103）Spencer (2014), p. 48.

ある。もちろん、入手しやすい資材として再利用しただけという可能性はある。

以上をまとめると、エジプトの統治拠点としてのサイの町の性格を反映して、エジプト側からの目的による文字使用は認められるが、ヌビア人の使用あるいは借用という動きは見られない。副総督の名前はあるが、その職務上の使用でしかない。サイの町での文字使用は、規模が違うので単純に比較できないが、テーベ等他のエジプトの町の神殿に見られる文字使用や情報量の圧倒的多さを考えると、きわめて限定的ということができる。

第3節　SAC5と文字

第1項　エリート層の墓としてのSAC5

SAC5は、サイの町から約800m南にあるエリート層の墓地である。新王国時代トトメス3世以降使用されるようになり、クシュ王国ナパタ期[104]まで長期にわたって使用されていたことが確認されている[105]。現在までに26基確認されており、ピラミッド型の上部構造を持つと推定される墓も多く、ピラミディオン[106]も発見されている。典型的なエジプト様式の墓地とされており、ヌビアにおいてはアニバ、ソレブ、アマラ西、エジプトではテーベとの類似性も指摘されている[107]。

エジプト様式の墓地での文字使用は神殿と同様にとても多く、新王国時代サイでの文字の使用について知るための重要な資料となる。エジプト様式での墓地における文字使用は、主に名前、被埋葬者について書かれた伝記的なもの、供養文、『死者の書』の記述などが一般的である。特に名前は重要で、その人の存在を神に伝える重要な役割を果たす。そのため、いくつもの場所に名前が書かれているのが一般的なので、もし被葬者がエジプト人であるとしたら、もしくはエジプト様式の埋葬なら名前がないのは非常に奇妙[108]だということである。

逆に、ヌビア様式では名前はないのが一般的である。つまり、エジプト文化に同化したのであるなら、エジプト同様に名前が残されていて当然ということである。ましてや、エジプトの統治機構に参画したエリート層ならなおさらのことと言える。

エジプト様式の埋葬では棺の使用が一般的であり、装身具、バスケットが副葬品として入れてある。テーベでの調査では、所属する社会的階層が上層になるにつれ副葬品が豊富になり、例えば中流層になるとシャブティ、スカラベ、人形、護符、カノポス壺、サンダル、衣服がこれに加わる。さらに上層になると、パピルス、ゲーム、仮面などを入れるということがわかっている[109]。

この中で、名前が書かれている主なものは、棺、シャブティ、スカラベである。また、副葬品ではないが、名前がわかるものとして自伝碑文と呼ばれるものもある。墓室の入り口付近などに名

104）前4世紀ころまで。クシュ王国の編年については議論があるが、ここではトュルクに従う。Török (2015), pp. 19–24.

105）J. Budka, “The Pharaonic Town on Sai Island and its Role in the Urban Landscape of New Kingdom Kush”, *Sudan & Nubia* 19 (2015), pp. 40–53, p. 47.

106）ピラミッド型上部構造の、頂部の四角錐のこと。サイでは、T26と呼ばれる墓地遺構でだけ発見されている。

107）J. Budka, “Pyramid Cemetery SAC5, Sai Island, Northern Sudan an Update Based on Fieldwork from 2015–2017”, *Ägypten und Levante* 27 (2017), pp. 107–130, pp. 107–110.

108）Säve-Söderbergh and Troy (1991), p. 9.

109）S. T. Smith, “Intact Tombs of the Seventeenth and Eighteenth Dynasties from Thebes and the New Kingdom Burial System”, *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 48 (1992), pp. 193–231（以下、Smith (1992) と略）, p. 219.

前、功績、人柄などを描いたものである[110]。故人について記されたステラがあることもある。

第2項　SAC5と名前

本項では、SAC5でそれぞれの物と名前や文字の状況がどのようなものであるか、確認したい。ただ、残念ながら、棺はその一部だけがばらばらになったもの[111]しか報告されておらず、詳細は確認できなかった。また、自伝碑文も発見されていない。なお、名前が記されるものとしては他に葬祭コーン[112]もあるが、今のところ上ヌビアではトンボスでだけ存在が確認されていて、サイでは未発見である。ステラも見つかっていない。このため、本稿ではシャブティとスカラベについて取り上げることとする。なお調査の過程で、それぞれの墓にT1~T26までの番号が打たれているので、本稿でもその表現を使用する。

最初に、全体でどのくらい個人の名前が発見されているかについて取り上げる[113]。現在までのところ、確認できる埋葬者の人数は26基の墓全体で212名[114]であり、そのうち何らかの物に記載があって、一部であっても埋葬者の名前が判明する人は、SAC5全体で16名である（表2参照）。

先に挙げたテーベの例では、埋葬者110名のうち、名前がわかるのは39名であった[115]。この数値と比較すると、テーベよりかなり少ない数と言える。ただし、スミスが挙げている数字は、撹乱を受けていても保存状態がよいものであるので、単純には比較できない。同じ基準にするのは不可能だが、比較的保存状態がよい[116]ものだけにすると、SAC5では全体で192名になる。ただし、保存状態が悪い墓で名前がわかる人も1名いるので、それを除外すると、名前がわかるのは15名となる。

傾向として、サイではエジプトよりも名前が残っていないと言うことができる。上ヌビアの他の地域では、第2急湍近くのブヘン、サイより上流に位置するソレブ、アマラ西の各遺跡が、サイ同様名前が少ない。しかし、第1急湍と第2急湍のほぼ中間に位置する下ヌビアのアニバでは名前が

110）畑守泰子「墓に刻まれた世界：古代エジプトの官僚たちの世界観」歴史学研究会編『史料から考える世界史20講』岩波書店、2014年、12-20頁、13-14頁。

111）A. Minault-Gout and F. Thill, *Saï II. Le cimetière des tombes hypogées du Nouvel Empire (SAC5)*, vol 2, Cairo: L'Institut français d'archéologie orientale du Caire, 2012, p. 91, Pl. 87.（以下、この書については、Minault-Gout and Thill (2012), vol. 1あるいはvol. 2と略）

112）葬祭コーンあるいは墓軒装飾コーンと呼ばれるもの。墓の入り口の軒に飾られる。トンボスの葬祭コーンについては以下を参照。S. T. Smith and M. R. Buzon, "The Fortified Settlement at Tombos and Egyptian Colonial Strategy in New Kingdom Nubia", in: J. Budka and J. Auenmuller (eds.), *From Microcosm to Macrocosm*, Leiden: Sidestone Press, 2018, pp. 205-225, pp. 207-212.

113）以下の分析においては、基本的にMinault-Gout and Thill (2012), vol.1, vol.2とA. Retzmann, J. Budka, H. Sattmann, J. Irregeher and T. Prohaska, "The New Kingdom Population on Sai Island: Application of Sr Isotopes to Investigate Cultural Entanglement in Ancient Nubia", *Ägypten und Levante* 29 (2019), pp. 355-380. のデータとを使用する。それ以外のデータについては、個別に注記する。

114）Minault-Gout and Thill (2012), vol.1. およびJ. Budka, "Tomb 26 in Cemetery SAC5 on Sai Island", in: J. Budka and J. Auenmuller (eds.), *From Microcosm to Macrocosm*, Leiden: Sidestone Press, 2018, pp. 185-196. により集計した。ただし完全な形で残っているものばかりではないので、誤差がある可能性がある。また、長骨だけあるいは骨片など、部分的に残っているものについては、頭骨以外はカウントしていない。

115）Smith (1992), pp. 193-231.

116）保存状態がよいのは、T1、T2、T3、T5、T6、T7、T8、T12、T13、T14、T20、T21、T26である。Minault-Gout and Thill (2012), vol.2の墓室内の保存状況図を基に、副葬品と人骨の状況で判断した。

表２　SAC5 で確認できる名前と文字

番号	埋葬者数	文字使用のもの	確認できる名前と文字
1	4	シャブティ、スカラベ	
2	7	シャブティ、スカラベ	メリメス、フウイ、キイイリイ、ホルエムヘブ、ウセルハアト（5 名）
3	25		（ラメセス 3 世）エジプトの王は神格化され、その名はスカラベ等の装飾品によく使われる。以下、王のような人物名や神の名前はあ（　）内に入れて表記する。
4	不明		
5	11 の頭骨	心臓スカラベ、つぼ、シャブティ	イピイ、ヘヌウトマアト、ネビイ（3 名）
6	12		
7	6	装飾品	（トトメス 3 世）
8	40	心臓スカラベ、シャブティ	ヘンセバア、シイ（2 名）
9	2（犬）	礼拝室の壁の破片	…ナクト（1 名）
10	不明		
11	骨片	スカラベ	（マアト）
12	骨片		
13	不明		
14	41	スカラベ	（神への賛辞）
15	2		
16	不明	ステラ、スカラベ	アセト、（善き神、トトメス 3 世）（1 名）
17	頭骨片		
18	不明		
19	長骨		
20	約 40 焼けた骨	ファイアンス片、シャブティ	プタハ…、（オシリスへの賛辞）（1 名）
21	不明		
22	不明		
23	不明		
24	4		
25	11	スカラベ	（アムン神、トトメス 3 世）
26	調査中（9 名）	ピラミディオン、まぐさ石、シャブティ、つぼ	ホルナクト、クヌムメス、ヘヌンエフ（3 名）（『死者の書』のスカラベ）
計	約 203 人		16 名

（出典）
Porter and Moss (1952); A. Minault-Gout and F. Thill, *Saï II. Le cimetière des tombes hypogées du Nouvel Empire (SAC5)*, Cairo: L'Institut français d'archéologie orientale du Caire, 2012; J. Auenmüller, "People on Sai: Prosopographical Contributions to the 'Social Fabric' of Sai in the New Kingdom", in: J. Budka, *Across Borders 2: Living in New Kingdom Sai*, Vienna: Austrian Academy of Science Press, 2020, pp. 365–394 より作成。

よく残っていることから、下ヌビアと上ヌビアで違いがあることが推定できる。さらに同じ上ヌビアでも地域ごとの違いがあると考えられるので、地域ごとに具体的に考察すべきものであると思われる。

名前が発見された墓は、26 基すべてではなく 7 基に限定される。これは、保存状態とも関連するため、逆に言うと名前がわかる墓は保存状態がよい傾向にあるとは言える。ただし、保存状態だけの問題ではない。これについては、あとで再度検討する。

次に、何に名前が書かれているかについて確認したい。先に挙げた名前がわかる 16 名のうち、シャブティに名前がある人は 6 名、スカラベに名前がある人も 6 名である。T2 のキイイリイのように、シャブティとスカラベの両方が残っている人もいる。つまり、ほとんどがシャブティとスカラベということになる。

これ以外では T2 のウセルハアトは護符に、T5 のヘヌウトアアムはファイアンスのつぼに、T5 のメスネフェルはミニチュアの石棺にその名前が残っていた。また、礼拝室の壁と思われる破片、ステラ片からわかるのが、それぞれ 1 名ずつである。

例外的なのは T26 のホルナクトで、発見されたピラミディオンにその名前があった。ホルナクトは、まぐさ石にも名前があった副総督である。T26 は本来クヌムメスという人のファミリーの墓なので、ホルナクトが再利用したようである。以上のように、名前が確認できるものはシャブティとスカラベが中心なので、この 2 つについて詳しく見ていきたい。

第 3 項　SAC5 のシャブティ

シャブティは、エジプト中王国時代以降発展した副葬品である。当初シャブティには何も書かれていなかったが、『死者の書』の呪文 6 [117] で装飾されるのが一般的になった。またシャブティは、本人の身代わりとして死後に神の命に答えるためのものであるから、『死者の書』と合わせて通常は埋葬者の名前が記されている。初めの頃は死者一人に一つだけであったが、新王国時代になると大幅に数が増え、セティ 1 世の墓には 700 体見つかったと言われている [118]。SAC5 でも、多くのシャブティが出土している。ただし数の多寡については比較が容易ではないため、名前および文字が記されているかどうかを中心に検討する。

SAC5 でシャブティが発見された墓は 26 基のうち 6 基、総数は 70 体 [119] である。材質で分けると、石製シャブティが 5 体、ファイアンスが 25 体、テラコッタ [120] が 40 体であった。石製シャブティはエジプトから輸入したものと推定されており、ファイアンスとテラコッタのものは地域で製作されたものと推定されている [121]。ただし、現在までのところサイではファイアンスの工房が発

117）葬礼文書である『死者の書』は、パピルスで副葬品として墓に入れるが、シャブティにも書かれるようになった。呪文 6（または第 6 章）は、シャブティが冥界で埋葬者に代わって仕事をするよう、命があればそれに応えよという意味の内容である。

118）シャブティの理解については、イアン・ショー、ポール・ニコルソン（内田杉彦訳）『大英博物館古代エジプト百科事典』原書房、1997 年（原著は 1995 年）、225–226 頁によっている。

119）Minault-Gout and Thill (2012), vol. 1, pp. 174–175.

120）素焼き粘土製の像。

121）R. Lemos and S. Tipper, “Sudanese and Nubian Archaeology: Scholarship Past and Present”, in: R. Lemos and S. Tipper (eds.), *Current Perspectives in Sudanese and Nubian Archaeology A Collection of Papers Presented at the 2018 Sudan Studies Research Conference, Cambridge*, Oxford: Archaeopress, 2021, pp. 1–12, p. 3.

見されていない[122]ので、ローカルのものかもしれないがサイとは限定できない。

この3種類のシャブティは、その品質にかなりの差があるように見えるので、使用するシャブティの違いは埋葬者の所属階層を反映しているかもしれない。特に、テラコッタのものは形も不揃いな印象があり、SAC5はエリート層の墓地とはされているが、その下層の人々が埋葬されているようだ。なおテラコッタのシャブティは、T20に集中しており、この墓を使用しているファミリーあるいは関係する人々の特徴を表していると考えられる。

70体のシャブティのうち、名前が書かれているものは7体だけであった。名前はわからないが、「調査官」という称号が記されたシャブティが1体発見されている。判読不能のものも少数あるが、約60体のシャブティには何も書かれていなかった。『死者の書』を記し、名前を入れるのが一般的とするなら、例外的であるはずのシャブティが多数を占めていることになる。

ただし、素材や墓ごとの違いに注目すると、違う面が見えてくる。石製シャブティの場合、5体のうち何も書かれていないのが2体、ファイアンスの場合も、25体のうち『死者の書』も書かれていない文字なしのものは2体だけであった。しかしテラコッタのものは、すべて何も書かれていない。

石製およびファイアンスのシャブティからは、長官ネビイや書記のホルエムヘブの名前が発見されており、いわば地域エリート層上層の埋葬であったと考えられる。テラコッタのものは、先に述べたように、サイのエリート層の中では下層に位置していると思われる。つまり、ともにエジプト様式の埋葬といえるが、階層により違いがあり、名前を残すのは上層の傾向ではないかということである。

また、テラコッタ製シャブティの集中しているT20は、新王国時代末期のもので、エジプトの力や権威が低下しつつある時期のものである。以前と同じようにシャブティというエジプト様式の副葬品を使用しているが、その内実には変化がみられるようになっていると考えられる。階層とともに時期的な変化も考慮に入れる必要がある。つまり、このようなエジプト様式の埋葬習慣はエジプト撤退後も存続することが知られているが、エジプト様式ではあるが内容はサイの慣習へと変化していったと考えられるということである。

ヌビア社会の「エジプト化」という説明の根拠の一つは、埋葬習慣の変化である。しかし、名前を残さないことをどう理解するか。地域エリートはエジプトによるヌビア統治の一翼を担う存在であり、権力との近さからエジプト文化を積極的に受容したであろうと推定できる。アマラ西の例でも、エリート層の埋葬で、同様にエジプト様式の埋葬習慣が確認される。しかし、新王国時代のもので1例だけ確認されているエリート層でない墓は、墳丘墓と呼ばれるヌビア様式の形態であり、埋葬習慣ともにエジプト様式ではなかった[123]。

122）J. Budka, “The Fortified Pharaonic Town on SaiIsland: New Results from Current Fieldwork (2013–2014)”, in: M. Honegger (ed.), *Nubian Archaeology in the XXIst Century: Proceedings of the Thirteenth International Conference for Nubian Studies, Neuchâtel, 1st-6th September 2014*, Leuven: Peeters, 2018, pp. 293–300, p. 297.

123）M. Binder, “Cultural Tradition and Transitions during the New Kingdom Colonial Period and Its Aftermath: Recent Discoveries from the Cemeteries of Amara West”, in: J. R. Anderson and D. A. Welsby, *The Fourth Cataract and Beyond: Proceedings of the 12th International Conference for Nubian Studies*, Leuven: Peeters, 2014, pp. 487–505（以下、Binder (2014) と略）, p. 502.

このように、上ヌビアのエリート層ではエジプト様式が受容される傾向にあると言える。にもかかわらず、輸入してまでシャブティを使用する階層の人々でも、全員が名前を残さないということは、エリート層の上層でも文字の使用やエジプトの埋葬習慣を必ずしも全面的に受け入れたわけではないことを示している。つまり、エジプトのモノを使用するが、内容的にはヌビアの様式が根本にあるということである。

また、注目すべきシャブティも発見されている。T8 のヘンセバアという人の名前があるシャブティには、頭部や肩のところにエジプトでは見られない線刻の模様[124]が彫ってある。この線刻はヌビア風のものと解釈されているものであり、埋葬者およびその家族が自分たちの好みに合わせたことがよくわかる。

以上のことから、埋葬習慣の変化をもってヌビア社会が「エジプト化」したという議論は、史料に基づかない一面的な議論と言える。上記のシャブティの例からわかるように、具体的な事情は不明であるが、実際にはサイの人々は自分の好みで、あるいは状況に合わせてエジプト文化を選択したと考えるべきである[125]。

第 4 項　SAC5 の心臓スカラベ

次に、スカラベに見られる特徴について述べる。スカラベは、護符や印章、指輪の受け座として用いられた。中王国時代後期より副葬品として用いられるようになり、『死者の書』呪文 30 を彫った「心臓スカラベ」と呼ばれるものが、死者の胸の上に置かれるようになった[126]。

この心臓スカラベには、シャブティ同様名前が彫られるのが一般的とされる。スカラベ全般では数も多いことと、必ずしも名前や文字が使用されるわけではないことから、本項では名前とセットであることが一般的な心臓スカラベを取り上げる。SAC5 でも、この心臓スカラベのおかげで名前がわかる人が上記の通り 6 名いる。

心臓スカラベは全部で 18 個発見されている[127]が、名前が書かれているのは 6 個だけである。残り 12 個のうち 9 個は、『死者の書』の呪文、クヌム神[128]の名が書かれてあるものや、判読できない文字が彫ってあった。注目すべきは、何も文字が彫られていない心臓スカラベが 3 個あったことである。シャブティ同様、やはりここでも名前や文字が見られないことが確認できる。

また、全体で 9 基の墓からスカラベが出土しているが、名前の書かれたスカラベが発見された墓は 3 基だけである。特に T2 に心臓スカラベが集中しており、名前のわかる 6 名のうち 4 名がこの

124）Minault-Gout and Thill (2012), vol. 2, p. 96, Pl. 92.

125）エジプト史の側からの表現である第 25 王朝（前 747–656 年頃）、ヌビア史からの表現ではクシュ王国のエジプト統治時代とされる時期までは、シャブティはヌビアにおいてエジプト人居住地以外発見されていない。エジプト統治下において、シャブティはヌビア文化には取り入れられなかったと言える。また、クシュ王国時代のシャブティについても、エジプトと異なる意味があったという指摘がある。Howley (2018), pp. 22-25.

126）Wilkinson (2005), p. 214.

127）Minault-Gout and Thill (2012), vol.1, p. 198.

128）クヌム神はエレファンティネ地域（第 1 急湍付近）でとくに信仰された神。サイでクヌム神信仰が広がっていたことを示す。他にも、クヌム神の名前が記されたスカラベを、SAC5 でよく見ることができる。また、このようにクヌム神の名前がよく発見されるということは、サイとエレファンティネのつながりを示唆していると考えられる。クヌム神については以下を参照。Wilkinson (2003), pp. 194–195.

墓である。残りはT5とT8である。スカラベは大きなものではないので、すべてが発見されるわけではないが、T2に集中しているということは、この墓に関係する人々の何らかの意識の表れと考えられる。

以上をまとめるなら、サイでは心臓スカラベの使用も限定的であると言える。やはり名前を残さない例が大多数であることから、エジプト様式ではあるが、文字や名前を記さないという点で、やはりエジプトの文化になったというより、ヌビアの人々が置かれた状況に応じてエジプトの文化を選択したと考えるべきであろう。

第4節　ヌビア社会と文字

本章で検討したことから、次のことが言える。第1は、エジプト支配下の町なのに、町の中での文字使用が少ないということである。使用目的も、エジプトの権威を示すことや、エジプトの神をアピールするための文字使用がほとんどである。

第2に、墓地における文字や名前の少なさである。多くの名前が残されているテーベの例から考えると、資料の制約はあるものの、かなり少ない。サイとエジプトで、埋葬における名前に対する扱いや文字使用の在り方は、やはり異なるということである。

エジプトとヌビアで、副葬品の種類など表面的には似たような状況であるけれども、名前の欠落や文字の少なさという点は決定的に異なる。近隣のアマラ西においても、墓地から名前が一切発見されていない[129]ことが報告されている。このことから、サイだけでなく上ヌビア、特に第3急湍付近では、文字と名前に関しては使われない傾向にあると言える。

以上をまとめると、次の点が指摘できる。第1に、一部の人を除いてエジプトの信仰を受容していないということである。先に述べたが、文字は神々と人間を結び付けるものである。ここから、文字使用はエジプトの神々あるいは信仰への改宗という指摘[130]がある。これが正しいとすれば、サイでの文字使用からは、エジプトによる統治の時代を経たにもかかわらず、エジプトの神々を全面的に受容したわけではないということができる。

第2に、文字が必要となる行政機構にはならなかったということである。注83の論文でモルコットは、ヌビアにおいてはエジプトのような大規模な官僚制度は存在しなかったこと、そのため王の役割が重要であったことを指摘する。これは少し後の時代の話ではあるけれども、この時代のサイにも援用できるのではないか。エジプトから地域の統治を委託された地域支配層がどのような組織を持っていたかは明らかではないが、文字使用の状況からは、官僚制的な組織というより、地域支配層を中核とした人的つながりによる仕組みを想定ができる。

しかし第3に、次の点にも注目しなければならない。SAC5から発見された副葬品において、エジプトのものであるビーズやスカラベ、幸福や多産などを願うベス神、タウレト神の護符[131]などが発見されていることである。これは、エジプトの信仰の中で、日常生活の幸福を願う神々が人々

129）Binder (2014), p. 502.

130）F. Doyen and L. Gabolde, “Egyptians Versus Kushites: The Cultural Question of Writing or Not” in: N. Spencer, A. Stevens and M. Binder (eds.), *Nubia in the New Kingdom*, Leuven: Peters, 2017, pp. 149–158, p. 153.

131）Minault-Gout and Thill (2012), vol.2, p. 125, Pl. 119.

に浸透してきたということである。

文字使用の視点から見れば、サイにおける文字使用はエジプトから来た人々やそのファミリーの使用が中心だったと推定できる。ただ、地域のエリート層を中心にヌビアの人々の使用も見られるが、ヌビアの人々がエジプトの文化を全面的に受容したのではなく、時々の歴史的条件に応じて、自分たちがいいと思うものを選択的に受容したと言えるのではないか。その選択に際しては、地域[132]、階層、家族による違い、また時代による変化が大きいと推定する。

この時期のヌビアの人々は、文字を知らなかったのではなく、文字を知っていたけれどもそれが必要になる生活に、必ずしも変えようとはしなかったということである。しかし、単なる拒絶でもなかった。自分たちが必要とするもの、自分たちがいいと思うものについてはおそらく積極的に取り入れた。ベス神のような護符以外に、幸福を願う女性の小像が居住地跡から見つかっていることも、これを裏付けている。

最近のヌビアの歴史的研究の特徴を一言で表現するなら、多様性の強調[133]であろう。今、C グループやパン・グレーブ[134]、ケルマといった、従来からあるヌビアにおける集団の枠組みが問い直されようとしている。これまで考えられていた以上に相互の結びつきや交流があり、明確に異なる集団であったわけではないことが明らかになってきたからである[135]。ナイル川流域では社会も文化もかなり流動的だった。それぞれの地域の独自性はもちろん存在するが、自然的、社会的、政治的等の状況に応じて、他の文化を取り入れ自分たちのものとしたと考えるのが歴史的な現実に近いと言える。

これまで本稿では、ヌビア文化、エジプト文化と表現してきたが、正確ではない。そのような単一の文化ではなく、広範囲かつ長期ににわたるナイル川流域の諸集団の交流の存在から、大きくナイル川流域文化圏と表現できるようなものが存在し、それぞれの地域ごとに小さな文化的なまとまりがあるとする方が実態に近い。ただし、エジプトはその国力の強大さから、ヌビア地域よりも一体性があったであろう。そしてそのようなまとまりが相互に絡み合い、各地域の自然的、政治的、社会的状況等に応じて、新たな文化を生み出していくととらえた方が歴史的現実を正確に表現できるであろう。

132）地域によりエジプト文化受容に違いがあることが、すでに指摘されている。Welsby and Welsby Sjöstörm (2006–2007), p. 389.

133）例えば、ウイリアムズは、ヌビアは文化的に一枚岩ではないと強調する。B. Williams, “The Napatan Neo-Kushite State 1: The Intermediate Period and Second Empire”, in: G. Emberling and B. Williams (eds), *The Oxford Handbook of Ancient Nubia*, Oxford: Oxford University Press, 2020, pp. 411–432, p. 412.

134）20 世紀初頭にライズナーがヌビアを調査した時、出土した遺物からいくつかの集団があることに気づき、便宜的に A グループ、C グループというように分類した。パン・グレーブのパンは平鍋や浅い皿の意味、グレーブは墓のこと。墓の形状から集団の名前を付けている。この名称は現在も使用されており、その枠組みが妥当かどうか、いま問われている。

135）A. de Souza, “After ‘InBetween’: Disentangling Cultural Contacts across Nubia during the 2nd Millennium BC”, *Sudan & Nubia* 25 (2021), pp. 230–242, p. 230.

おわりに

エジプトとヌビアの関係についての見方は、エジプト中心主義的な見方から、ヌビアのアイデンティティの存続の強調へと変化してきた。両方の見方に共通するのは、エジプトとヌビアの文化を別々のものとする二項対立的なとらえ方である。

しかし、エジプト文化とヌビアの文化は、明確に区別できるようなものであったのか。すでに述べたように文化はスペクトラムであると考えるなら、さまざまな集団の動きとともに文化面においても流動的に変化してきたと考えるのが妥当であろう。

本稿では、エジプトとヌビアの関係について、エジプト統治下にあった上ヌビアのサイを中心に検討してきた。そこで見えてきたことは、強大な権力を背景としたエジプトによるヌビア統治により、サイの地に大きな変化があったということである。

軍事拠点であり交易の拠点となるサイの町が建設され、下ヌビアを含むエジプトの勢力圏から多くの人々が移動してきた。人だけでなく、エジプト様式のモノや慣習も入ってきて、サイの社会に定着した。サイの地域に住む人々も、かなりの程度その文化を受け入れたように思える。しかし、このことから「エジプト化」したと考えるのは早計である。またスミスのように、エジプトに抵抗するヌビアのアイデンティティの持続を強調することも同様に一面的である。

このような問題状況を考えるために、本稿では文字使用に焦点を当てた。その結果、エジプト統治下であるにもかかわらず、サイではエジプトほど文字使用が浸透していない。地域のエリート層は、エジプトから統治を委託された立場なので文字使用を受け入れたと思われるが、その上層部が中心だったように思われる。つまり、文字使用はこの時点では限定的ということができる。ただし、これはサイ近辺のことである。先に述べたアニバの例からわかるように、下ヌビアでは状況が異なることが推定できる。

サイの変化は事実だが、人々が受容したものと受け入れなかったものがある。まとめるなら、サイの人々は、それぞれの立場やそのファミリーの考え方、あるいは個人の考え、利便性、好みにより、土器をはじめとする生活用品やベス神等の信仰を受け入れた。しかし、文字使用については一部の人を除いてその必要性を感じなかった。言いかえるなら、文字と結びつくアムン神などのエジプトの信仰はこの時点では上層部だけと推定できる。

これまで、ヌビア文化という表現が使われてきた。しかし、本稿の分析が示唆するように、地域よる違い、階層による違い、エジプトによる統治のあり方により、多様なものとなっている。また、当然時代が進むにつれ変化する。また、ベス神の受容に見られるようなエジプトの文化への親和性も存在する。

エジプト文化とヌビア文化という対立した枠組ではなく、ナイル川流域を包含する大きな文化圏が存在し、その中には多様な文化が存在すると考える方が歴史的実態に合致している。ヌビアにおいては、ヌビア文化でまとめてしまわないで、例えば下ヌビア、第３急湍付近の地域、メロエ地域などは、それぞれの地域的特性をさらに深く分析すべきであろう。また、本稿で取り扱った時期は、いわば植民地的状況下の事例である。他の平和的な共存の時期の事例とも比較して、諸集団の交流を考える必要がある。今後の課題である。

（本学大学院博士後期課程）